

平成27年度
江戸川学園
取手中学校

入学試験問題（第1回）

国語

（60分 満点：150点）

注 意

1. 指示があるまで開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入下さい。
3. 用具類の貸し借りは禁止します。
4. 指示があるまで席をはなれてはいけません。
5. 質問があればだまって手をあげて監督者を呼び下さい。
6. 問題用紙も解答用紙といっしょに出して下さい。問題用紙の余白は下書きとか計算などに利用してもかまいません。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出し問題に答える場合、句読点・記号はすべて一字とする)

たくさんの木の实が、わたしたちの頭の上に勢いよく降り落ちてきた。わたしの家の庭に生えている、この村で一番大きなアカガシの木から。

ゴリづらの木。じいちゃんだけがそう呼んでいる。

ザワザワザワ

七月の暑さをはね飛ばしたいのか、いっせいに枝葉が揺れた。一瞬身構えたけれど、もう木の实は落ちてこない。自分のてのひらの上に重なっている加藤くんの手に気づいて、あわてて振りほどいた。

「びっくりしたなあ。夏なのに木の实が降ってくるなんてさ」

□ A わたしが笑うと、ずっと黙っていた加藤くんは、うつむいたまま顔も上げずに言った。

「おれ、帰るね」

足もとに置いていた鞆を引つつかんで、¹加藤くんは、逃げ出すように走り出した。

「えっ!? ちょっと、待ってよ」

追いかけて門から道へ出ると、五十メートル先のゆるやかな下り坂を駆け下りていく加藤くんの背中が見えた。中学一年から陸上をやっているだけあって、さすがに足が速い。

加藤くんの姿が見えなくなつて、夕空にただよう茜雲が自信ありげにわたしの目に映りこんでくる。じりじりと角膜を焼かれているような気がして目をつむつた。

長かった一日。男子と二人で下校することなんて、初めてだったのに。ずっと気になっていた加藤くんが、家まで送るとわざわざ誘ってくれたのに。なにもあのタイミングで落ちてこなくても、木の实。

隣の家で夕ごはんの魚を焼いているのか、醤油の焦げた香ばしいにおいが鼻先にまとわりつく。急におながすいてきて、わたしは

□ B 坂道を見つめることをやめた。

家よりも広い庭に戻ると、今日の惨事を引き起こした張本人・ゴリづらの木が、威風堂々と構えていた。何重にも枝葉を重ね合わせ、百年以上も生きているという太い幹を、

□ C 見せつけている。

「どうして邪魔したのよ」

わたしはゴリづらの木を睨みつけた。

ザワザワザワ

まるで、²仏頂面のわたしに応えようとするかのように、また枝葉がいっせいに揺れた。なにかを思い出しそうで、空腹に負けて玄関の扉を開けるまで、わたしはしばらくそこから動けずにいた。

村にひとつしかない中学校は、家から坂を下り、川沿いの道をたどった先にある。自転車に乗れないわたしはいつも、川面^{かわも}をただよう木の葉や、誰かが落としたモロモロになった軍手などを眺めながら、三十分ほどかけてゆっくりと歩く。集団登校の小学生軍団がヘルメットを押さえながら、わたしを駆け足で追い抜いていく。

今日はいつにもまして足が重たい。それに少しおなかの具合もおかしいみたいだ。このまま引き返して、休んでしまってもいいだろうか。どうせ母さんはいつものように、部屋の隅々までをパーフェクトに美しく磨き上げることに頭がいっぱいで、皿を洗う手を止めずに「いいわよ」と答えるに違いないし。

さらに、困ったようにうつむいていた昨日の加藤くんの細長い顔を思い出すと、余計に歩幅がせばまり、前へ進むスピードがぐんと落ちた。小学生どころか、手押し車を押したお婆さんまでが、わたしをゆったりとした歩調で追い抜かしていった。朝礼の時間ギリギリになって教室に入ると、学級委員の女子が必要以上に大きな声を張り上げていた。

□ 「三年二組のオーディションは木曜日です。希望者は今からわたしのところまでプリントを取りにきてください」

³ おお、神よ、今日は休まなくてよかったです。

わたしはあわてて学級委員からオーディションのプリントを受け取ると、後ろから三番目の自分の席に座った。前の方の加藤くんの席にちらりと目をやると、まだ来ていないようだった。麻衣子^{あやこ}がにやにやしながら、待ち構えていたかのようにわたしの席に近づいてきた。「やっぱり優ちゃんもコーラスチームのオーディション受けるんだ。やる気満々じゃん」

そう言う麻衣子の手にも、しっかりとプリントが握られている。

□ 「そりゃあそだよ。⁴三年になったら絶対にコーラスに出るって決めてたんだから。合奏チームなんて絶対にいやだよ」

プリントを二つに折って鞆の中にしまいながら、しばらくは自分の席に戻りそうもない麻衣子の顔を見上げた。

もうすぐやってくる期末試験が終わると、夏休みに入る。新学期が始まって最初の行事が、九月の音楽コンクールだ。三年生は各クラスがコーラスチームと合奏チームで課題曲を演奏する。とは言っても、コンクールの勝敗はコーラスチームの完成度に

かかっていた。オーディションに受かった二十人が合唱をする。落ちてしまった者、オーディション自体に参加しなかった者は、自動的に合奏チームに入れられる。致命的にダサイ合奏チーム。本格的な楽器を扱えるわけではないから、リコーダーやら太鼓やら、どう見ても小学生の発表会のように、ただのおまけだから誰も期待していない。

わたしは学校のどの行事も苦手だったけれど、音楽コンクールだけは心待ちにしていたのだ。まずは、コーラスのオーディションに受からないといけない。

「ところで。昨日、優ちゃん、陸上部のカトウと一緒に帰ったらしいね。何人かから目撃情報が出てるよ。いつのまにそんなのになったの？ 最近カトウが人気上昇中なのも知ってた？」

「まず、⁵ そんな呼ばれ方をしていることが初耳だったよ」

ははは、と D 笑った。

チャイムが鳴り、担任の鶴野先生が教室に入ってきた。麻衣子があわてて自分の席に戻ると同時に、後ろの扉から駆けこんできた加藤くんが、わたしの真横をすり抜けた。加藤くんが朝練のグラウンドから連れてきた砂埃のにおいが一瞬鼻をくすぐり、わたしは机に顔を伏せた。

「来週から試験なんだから、集中して授業を受けるようにな。家でもじっくり復習するように」

鶴野先生は、無駄に太くて濃い眉毛をグツと引き上げた。突っ伏していたわたしは少しだけ顔を上げて、砂埃を浴びた薄茶色の後頭部を盗み見た。

「桐島！ ⁶ さっそく先生に喧嘩を売ってるのか」

しまったと急いで背筋をのばした。顔が一気に熱くなる。押し殺した笑い声もらしながら、みんなが加藤くとわたしを交互に見る中、加藤くんだけがじっと動かずに、まっすぐ前を見つめていた。

(中島さなえ『いちにち8ミリの』所収「ゴリづらの木」 二〇一〇年 双葉社 一部改変した)

問一 空欄A～Dを埋めるのに適切な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 誇らしげに イ ごまかすように ウ うらめしげに エ 取り繕うように

問二 傍線部1とありますが、このとき加藤君は、なぜ「逃げ出すように走り出した」のですか。その理由が推測できる一文を文中から探し、その最初の五字を書きなさい。

問三 傍線部2の読みを平仮名で答えなさい。

問四 傍線部3とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 学校を休んだことを、後で学級委員の女子に責められずにすんだから。
イ コーラスチームのオーディションのプリントを受け取りそこなわずにすんだから。
ウ 加藤君より早く教室に入ることができ、ほっとしたから。
エ 学校に行くのが気が重かった私に、友人の麻衣子が明るく話しかけてくれたから。

問五 傍線部4とありますが、「わたし」が音楽コンクールに対して興味や関心を抱いていたことがわかる一文を、これより後の文章から探し、その最初の五字を書きなさい。

問六 傍線部5とありますが、「そんな呼ばれ方」とはどんな呼ばれ方ですか。その答えにあたる言葉を文中から抜き出さなさい。

問七 傍線部6とありますが、どういうことに対して「喧嘩を売ってるのか」と言ったのですか。その答えとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 担任の鶴野先生が話をしているのに、机に突っ伏して寝たふりをしてしたこと。
イ 男子と女子が二人で一緒に学校から帰るのは禁止されているのに、昨日加藤君と一緒に帰ったこと。
ウ 担任の鶴野先生が「家でもじっくり復習するように」といったことに対して、ふてくされた態度をとったこと。
エ 担任の鶴野先生が話をしているのに、先生とは違う方向を向いて、先生の話を聞いていないように見えたこと。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出し問題に答える場合、句読点・記号はすべて一字とする)

私たちの住むこの世界には、そこより先には進めないような果てがあるのだろうか？ 昔にさかのぼっていったとき、この世界はどのようなになっていたのだろうか？ 私たちの世界はある時に作られ、時間の経過とともに今日のような世界になったのだろうか？ これらはおそらく、人類の歴史がはじまったところから問い続けられている疑問である。

かつてはこの疑問に答えるのは宗教であり、また哲学であった。キリスト教の創世記では、一週間でこの世界が創造されたことになっている。わが国の古事記には男女の二神、いざなぎのみこと、いざなみのみことによる創世の物語が記されている。

十数年前、アイスランドを訪問したことがある。アイスランド大学の友人から宇宙論の講演をたのまれたのである。講演を終え帰国するとき、その友人から飛行機の中でも読んでほしいと一冊の本を贈られた。北欧五カ国の一つであるアイスランドには、他の北欧の国々と同じように、古代からの神話「エッダ」がある。彼から贈られた本は、このエッダの英訳であった。友人がこの本を贈ってくれたのは、この本のなかに世界の創造に関する一節があるからである。

「時の始まったときには、何もなかった。砂も海もまた冷たい波もなかった。地は見当たらず、上に空もなく大きな口を開けた裂け目があったが、どこにも草木はなかった。」

私は、大西洋の北極圏近くに浮かぶ小さい島国に住む人々が **A** について考えを巡らせていたことに感激した。

このように世界の始まりや時の始まりについての神話は多いが、**X** 的広がりについては記述は少ないようである。少ない例の一つに数えられるのが「三千大千世界」を描いた仏教の曼陀羅で、これは **B** を示すものである。仏教で世界とは、生きとし生けるものが住むところという意味である。人間は須弥山を中心とする世界に住むとされる。世界が一〇〇集ったのを小千世界、小千世界が一〇〇集ったのを中千世界、中千世界が一〇〇集ったのを大千世界といい、これが全宇宙である。大・中・小の三種の千世界から成るので「三千大千世界」と呼ばれている。この三千大千世界も一人の仏が教えを説く世界にすぎず、仏の数だけ三千大千世界は存在するという。曼陀羅の宇宙は、あたかも天文学の銀河宇宙のことを述べているようである。

人類は長い歴史の中で、自分の住む世界を観察し、地が平面でなく球面であることを知り、この地球を中心として太陽や惑星が回っていると考えた。しかし後に、地球上での惑星の運動を **A** セイミツに観測して、実は太陽を中心として諸惑星が回っているであり、地球もその惑星の一つにすぎないことがわかり、人類は、自らが **C** ではないことを知った。今日まで、人類は自身の世界を、太陽系から銀河系、そして銀河宇宙へと広げてきた。現在私たちは、宇宙は少なくとも一〇〇億光年(10²⁶メートル)を越える広がりをも

ち、少なくとも一〇〇億個の銀河が存在する世界であることを知っている。

二一世紀の現在、科学的な宇宙の描像はビッグバン宇宙である。私たちの住んでいるこの宇宙が、およそ一〇〇億年の昔、熱い火の玉として生まれ、一〇〇億年の過程で現在の姿になったという理論である。

一般によく使われる「ビッグバン」は、イギリスから輸入された経済用語で、**E** キンユウ自由化をはじめとする **U** キセイ緩和によって経済の **E** サイセイを図ろうとする政策である。

さて、²宇宙が熱い「火の玉」の急膨張で始まったという「ビッグバン」もイギリスでつくられた言葉である。

一九五〇年ごろ、膨張宇宙をどう説明するかでビッグバン理論と定常宇宙論が優劣つけがたく拮抗していた。「ビッグバン」理論はロシア生れのアメリカ人、ジョージ・ガモフによって一九四六年に提唱されたことになっている。一方の定常宇宙論は、当時ケンブリッジ大学天文学研究所の所長でもあった、フレッド・ホイルと彼の協力者によって一九四七年に提唱された。この理論は、宇宙には始まりがなく常に密度が一定で定常的であるとする考え方である。膨張にかかわらず密度が一定になるのは、物質密度が減少する分だけ物質が創生されるからだとする。今日から見れば、いかにも奇妙な仮定に基づいているが、当時はビッグバン理論が有力とされつつも、銀河の距離と後退速度から推定される宇宙の年齢が約二〇億年に過ぎず、地上の岩石の年齢よりはるかに若いという決定的な難点があったのである。

ビッグバンという言葉はホイルの発明である。彼がガモフの理論を、安っぽい「大爆発」モデルとさげすんで呼んだのが最初である。もともと、ホイルは後にBBCのインタビュで、決してさげすんでそう呼んだのではなく、ガモフの理論を適切に表現する言葉は何かとまじめに考えてそのように名づけたのだと語っている。

ビッグバンモデルの難点であった⁴宇宙年齢の矛盾は、銀河の距離の測定方法に問題があったために生じた結果である。一九五〇年代には距離の測定精度が高まって、宇宙の年齢は「延び」て地球の年齢との矛盾は解消し、また一九六四年には宇宙初期の「火の玉の化石」ともいふべき電波が宇宙を満たしていることが発見された。「宇宙背景放射」の発見である。こうしてビッグバン理論が勝利したのである。

(佐藤勝彦「宇宙論入門―誕生から未来へ」二〇〇九年 岩波新書 一部改変した)

問一 傍線部ア、エのカタカナを漢字に書き改めなさい。

問二 空欄Xに適切な漢字二字の言葉を考えて入れなさい。

問三 空欄A、Cを埋めるのに適切な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 世界の中心 イ 世界の構造 ウ 世界の創造

問四 傍線部1とありますが、この疑問に対して、現在最も有力な考え方はどのようなものですか。その答えとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 仏教の曼陀羅 イ 銀河宇宙論 ウ ビッグバン理論 エ 定常宇宙論

問五 傍線部2とありますが、宇宙論における「ビッグバン」を日本語に言い換えるときどのような言葉になりますか。その答えにあたる三文字の言葉を文中から抜き出しなさい。

問六 傍線部3とありますが、どういう考え方を「奇妙な」といつているのですか。その答えにあたる二十字の言葉を探し、その最初の五字を書きなさい。

問七 傍線部4とありますが、筆者は宇宙年齢のどういう点を「矛盾」と述べているのですか。答えが「宇宙年齢が」という点。」となるように文中から十六字の言葉を探し、その最初の五字を書きなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出し問題に答える場合、句読点・記号はすべて一字とする)

一般に老人は同じ思い出話を何度も何度も繰り返す。老人でなくても、中年ぐらいからこの傾向は^ア顕著^アになってくる。聞くほうはだいたい未来をもった若い世代だから、また同じ話を聞かされるのかとうんざりしているのに、そんなことはお構いなしに、まるでそのつどはじめて話すのだということをしる疑わなような調子で彼らは話し始める。

¹この現象は、それだけとしてみれば、もうこの人の精神は実質的には止まっており、固定化した過去の追憶を生きる以外に新しい発展など望めないのだというネガティブな印象しか与えない。ある意味でこれはそのとおりである。

しかし、そういう印象を与える多くの人も、現実には日々の仕事を旺盛にこなしていたり、人間関係を動かしたり新しい人間関係に動かされたりしている。彼らが自らの「精神の停止」を相手に強く印象づけるのは、親しい人間と^イ四方山話^イをするといった、ある制約づけられない状況におかれたときなのだ。²こういう状況のとき、人は無意識のうちに、自分の精神を「自由な」ところに突き出すことになる。

「自由な」というのは、必ずしも「解放された、自ら欲するがままの」というよいイメージの状態だけを意味するのではない。それは現在の関係性や属性をふり払った空虚な自分に帰らされるということでもあって、何物かにすがらなくてはられないような不安状態に陥るということも意味している。そのとき、人は多く、まるで自然過程のように、自分の過去をすがるべき何物かとして求め、かくて³自分の過去と自分とを等号関係においてしまうのだ。

現在に呼び返される過去とは、要するに「心残り」ということである。「心残り」という言葉はふつう、後悔のニュアンスとともに使われる。しかし、たとえある思い出が後悔や無念の感情を伴わない心地好い内容のものであっても、たえず呼び返されるという事実そのものが、何らかの心残りの存在を証しだてているのである。

美しい追憶や甘酸っぱい思い出は、自分がその経験の後に、それらが二度と帰らない過去であるという^ウ愛惜^ウの思いを知らず知らずつきまとわせたからこそ、追憶や思い出としての力を失わないのだ。

「あれらのことが永遠に続いていたら」という^エ嘆息^エが、人を「美しい過去」というイメージにつなぎ止める。⁴だからよい思い出も「心残り」の一種なのである。

中年から老人までのほとんどの人々が、ごく少数の固定化した記憶のみを選択して、それを半ば自動的に、繰り返し繰り返し語ろうとするのを見ると、「心残り」というものが、いかにそのつどの関係性から解放された時の個人を強く規定しているかがわかる。そうし

た心残りのあり方は、彼らをそこにつなぎ止めてしまうそれぞれの情緒の型ともいうべきものに由来している。それが何であるかを読み取ることは、ほとんどその人間の全体を正確に見抜くことに等しい。

【この話はまだどこにも書いていないと思うのだが（と言いながら、じつは記憶がいで、もうどこかに公表しているかもしれない。何人もの人に語ったことはあるので、書いてしまったかまだ書いていないか、そのへんがはっきりしない。私の頭もそれくらいにすっかり老年化しつつあるのだ）、私が小学校六年のころ、自宅から徒歩二十分くらいの距離にある大きな駅の周辺が盛り場として定着しつつあった。そこにさる有名デパートが進出してきて、商業地域としてのひとつの中心的な役割を担うようになった。

当時のいたずら盛りの子どもにとって、デパートというのは、ふらふらと浮遊するのに都合のよい、きわめて誘惑的な施設だった。私は、日曜日に二人の友人と「ふらふら」するためにそこへ出かけた。

私とひとりの友人とは成績がよかったので、大人たちは私や彼を「よい子」の部類に分類していたが、もう一人のAは、いわゆる「悪友」の部類に属する友人で、頭のめぐりもよいほうとはいえず、体は大人のように大きく喧嘩好きで悪さを繰り返しては教師の手を焼かせていた。

短期間ではあったが、私はなぜか六年になるとAと急速に仲良くなった。おそらく思春期にちかづいて、「優等生」をやるのにあきてきたのだと思う。もともと私の家庭環境は、「優等生」をすくすくと育てるのに適しているとはお世辞にもいえない状態だった。

Aは、つき合ってみると優しくとても人のいいところがあり、さほど筋金入りとは思えなかったのだが、それでも「不良」の有力候補ぐらいの風格は十分にあった。私は勉強ができるということで彼から一目おかれていたし、彼は彼で大人の世界の隠微な部分について、それとなく私に教授してくれていた。いいコンビだったのだ。

日曜のデパートは、どの階も客でごった返していた。一時間もふらついたろうか、そろそろ飽きてきたから引き上げようかと思いついたところ、屈強そうな中年男に「ちょっと来い」と言われて、私たち三人は、売り場の裏の公安室という狭苦しい部屋に無理やり連れ込まれた。「何よ……」と私たちは、身におぼえのない不安で互いに顔を見合わせたが、それ以上大人たちに問いただそうとはしなかった。

要するに、一人のおばさん客の財布を盗んだ嫌疑をかけられたのである。そのおばさんが自ら公安員に私たちを指したらしい。まあ、怪しまれても仕方のないふらつきをやっていたといえはいえるのだが、しかし、実際にはだれもそんなことはしていなかったし、私たちのだれも他の二人がやったかもしれないなどと思いませんでした。

持ち物検査を受け、数人の公安員に取り囲まれて絞られること二時間余りに及んだらうか。「白状」をしぶとく拒む私たちに公安員も

業を煮やし、一人一人を片隅に呼んで、「君がやっていないことはわかったが、もし残りの二人のうちどちらかがやっているとしたら君はどちらだと思ふ」という誘導尋問作戦に出たのである。今でも自分をふがいなく思うが、思わぬ災難に遭ってくだびればはてた私は、ついAの名前を口に出してしまった。後で聞いたところによると、もう一人の友人も彼の名を言ってしまったらしい。Aだけがその後長く絞られる結果となった。それから三人は交番にも連れて行かれたが、さいわい証拠不十分でその場で釈放ということになった。

たかが窃盗の嫌疑であつたからよかったものの、もつと深刻な事件だったら……と、後々自分のしでかしたことの大きさがわかるようになるにしたがつて、私は、Aに対する後ろめたさを胸のなかにずっと抱えることになった。Aとは中学校も別々で、それ以後会う機会がなかったが、いつか会ったら勇を鼓してあやまろうと思っていた。】

数年前、小学校のクラス会があり、三十数年ぶりで彼と再会することができた。会場に入ってくるやいなや、何と彼の吐いた言葉はこうだった——「小浜はどこだ。今日は小浜に会いにきたんだ」。

彼はうなぎ屋の親父として立派に一家を成していて、息子に継がせる方針も固まり、四歳の孫までいるということだった。時を逸してはならぬと思い、私は年来の思いをおずおずと打ち明けながら「お前に悪いことをした」と言った。Aは聞くなり、「何だ、そんなことを気にしてやがったのか！ バカヤロ、俺なんかおめえ、あれから傷害事件も起こしたし、少年院にも入ったしよ……俺は何にも気にしてねえよ」と笑い飛ばした。私は一瞬のうちにしこりが融けてゆくを感じて、ただひたすら嬉しかった。

「心残り」というものはえてしてこういうものだ。A、子ども時代に相手を傷つけたり裏切ったりしたことなど、相手はこちらが思っているほど気にしていないものなどと言いたいのではない。B この私の場合のように、幸いにしてそう言いきれるところもままある。C、こちらがとくに忘れてしまったのに、むしろは一生恨んでいるということだっていくらかもあるのだ。私は

D、小さい時の小さな失態、E 小さな失態ではないと言いたいのである。

昔、唐十郎の紅テント（状況劇場）の芝居で、「小学校の時、たしかおまえに消しゴム貸したよな、あれ、まだ返してもらってないんだけだな」という台詞で客を笑わせていた場面があったのを妙に印象深くおぼえている。この台詞に思わず笑ってしまうのは、じつはその向こうに笑えない真実が隠されていればこそである。

問一 傍線部ア～オの読みを平仮名で答えなさい。

問二 空欄A～Eを埋めるのに適切な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア むろん イ むしろ ウ いや エ それはじつは オ しかし反対に

問三 傍線部1とありますが、「この現象」の指すものを簡潔に述べた十七字の言葉を文中から探し、その最初の五字を書きなさい。

問四 傍線部2とありますが、「自分の精神を『自由な』ところに突き出す」ことは、「自由な」をよい意味でとらえない場合、どういうことだと述べていますか。その答えにあたる十一字と七字の言葉を文中から抜き出しなさい。

問五 傍線部3とありますが、このことを簡潔に述べた九字の言葉をこれより前の文中から抜き出しなさい。

問六 傍線部4とありますが、この理由を述べた一文を、これより前の段落から探し、その最初の五字を書きなさい。

問七 筆者が小学校六年のころの思い出について述べた「**一**」を、そのときの出来事がよくわかるように八十字以上、百字以内で要約しなさい。書き出しは「私たち三人は」とし、解答の中に「Aの名前」「窃盗の嫌疑」「後ろめたさ」という言葉を入れること。

国語 解答用紙

※印らんには何も記入しないこと。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

評點	※
----	---

--	--

問一	A							D	
問二									
問三									
問四									
問五									
問六									
問七									

1

問七						
問六						
問五						
問四						
問三		A		B		
問二						
問一		エ		イ		ウ

11

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
問七	私 た ち 三 人 は				A	ア
					B	エ
					C	オ
					D	
					E	